～昨日の風　明日の風～

経営コンサルタント独白録

［第140回］　アドラーの三角柱

戸敷　進一

1956年生まれ、宮崎県出身の経営コンサルタントで、㈱経営改善支援センター（福岡市、URL https://sien.co.jp/）代表取締役。業種を問わない「組織活性化」の専門家で、全国300社以上の企業の活性化を指導。全国の商工会議所や企業などからの依頼で講演活動もおこなう。明確で分かりやすい表現で驚くほど短期間で「組織」を変えるのが強み。
また、帝国データバンクの契約コンサルタントとして九州各地の企業を中心に多くの実績を上げている。

アルフレッド・アドラー（Alfred Adler）はオーストラリアの精神科医です。ジークムント・フロイト、カール・グスタフ・ユングに並んで、現在のパーソナリティー理論や心理療法を確立した人物です。彼の思想はアドラー心理学と呼ばれ広く世の中に知られています。その彼の言葉の中で私が最も関心を持たされた言葉がアドラーの三角柱と言う話です。

かわいそうな私？

三角柱は同時に2カ所しか見えません。アドラーの三角柱には

①かわいそうな私　②悪いのはあの人

と書かれています。多くの人はこの2つについて一生懸命話すのですが、三角柱の見えない部分にはこう書かれています。

③これからどうする？

私がこの話が好きな理由は、初めてお会いする経営者や経営幹部の方々の多くが、まず「かわいそうな私」と言う自分の現状について多く語るからです。

「自分はこれだけ頑張っているのに父親である社長が認めてくれない」「社員がついてきてくれない」「業界のしがらみで苦しんでいる」「自分の思いを周囲の人たちが理解してくれない」

そうした様々な自分の苦しみについて話をされるのです。その時に必ず【悪いのはあの人】という言葉がつきまといます。悪いのは自分ではなく、社長であり、上司であり、家族であり、部下であり、友人であり、時に社会や時代や政治家が悪いと言う話になっていきます。

悪いのはあの人？

人間の心理として悪いのは、あの人と言いたくなる気持ちはわかる気はします。人間は社会性の生き物ですから、絶えず他人と触れ合って生きています。その中で、思わず誰かのせいにしたくなる気持ちはわからないわけではありません。このように書いている私ですら、ときには恨みを込めて、誰かの顔を思い浮かべることもあります。

しかしながら、人間は他人の人生を生きているわけではなく自分の人生を生きています。その原点に立ち返れば、悪いのはあの人と言い続けている限り、絶えず自分は悲劇のヒーローであり主体的な人生を送ることができないのではないか。自分を取り巻く環境をいくらあげつらったところで自体が好転するわけでもありません。肝心な事は「これからどうする」です。

宿命と運命

宿命とは宿った命です。親から引き継いだ遺伝子や良い意味でも、悪い意味でも生まれた瞬間から自分に内在している命のことです。親兄弟、親戚や生まれた時代などは自分で選ぶことができません。つまり、あらかじめ定められた宿命と言うものを個人は持っています。それに対して運命とは自分で運ぶ命です。自分で運ぶとは自分で決めることであり、自ら選ぶことです。他人に何かを決めてもらう生き方は主体的とは言えず他人の人生を生きているようなものです。

教科書に未来は書かれていない

テレビの評論家の言葉や、新聞に書かれたコメントは全て他人の言葉です。時に参考になる話があったとしてもそれはどこまで行っても他人の言葉なのです。気をつけておかないと、我々は他人の言葉で何かを決めようとすることがあるかもしれません。

かわいそうな私、悪いのはあの人と言う考え方はある意味現実逃避の理由になります。大切な事はそれを充分承知した上で、自分自身でこれからどうするかを決めることです。

情報が溢れている時代なので、どこにでも答えが転がっていそうな気がします。ネットを探せば、SNSを眺め続ければ、誰かが答えを教えてくれそうな気がします。しかし、それは嘘です。自分の人生を生きるとは、自分で決めると言うことです。他人に自分の運命を託してはなりません。どんな教科書にも未来は書かれていません。

自分の選択

20年近く親しくさせて頂いている横浜の会計事務所の経営理念の一節にこのような文章何あります。

「現在は過去の自分の選択の結果であり、未来は今の自分の選択により創られる。

環境や他人のせいにせず、自分の人生に100%の責任を負います。」

混迷する時代において忘れてはならない言葉です。